

聖人の歩みたまいし道

人間には二つの傾向があります。真理に対する態度であります。人間になくはならなかった真理が、社会の中に形を造りますと、何時の程にか苔がつき垢がつきます。するとその苔や垢が真実なるものに取って代わって、やがてその苔や垢が尊重される。その苔や垢を因襲と言われますが、やがてはその因襲が無反省に社会的正義として横行します。そしてそれは大きな力として民衆にのぞみます。民衆はその力を、強大なる力なるが故に尊いと誤ります。そこで愈々その力の前に拝脆しようとしません。宗教の世界でも亦この事実を如何ともすることが出来ません。

けれどももう一つ違った世界があります。それは、因襲よりも、真実の真実は何であるのか、真理は何であるのか、一切の苔や垢を超えて、もつとく深く求めて、唯真実を聞き、真実を求め、真実を生き、真実を伝えようとする人の世界であります。言いかえると、常識的大衆に先立つて、より真実の世界を目がけて生きてゆく人の世界であります。

第一の世界を生きてゆく人は、その時代の賞讃と地位と栄達と幸福とが約束されません。

第二の人には、迫害と非難と苦難と貧困とが用意されてあります。

釈尊や、親鸞聖人や、法然上人や、その他の多くの聖賢の方々はそのいづれに生きていられたのでありましょうか。私は静かに念仏の中にこれらの大聖の御生涯を憶念して涙なきを得ません。わけても我等が大善知識、親鸞聖人の御一生を憶う度毎に、厳粛な心にならざるを得ません。

その頃の叡山には苔がついていました。俗衆はその苔をこそ大事にします。仏に生きるのではなくて、仏を弄び、仏の名によつて人間の栄達を考え、名利を得、更に権力によつて社会を威圧する。そこに用意されてあるものは、官位階品と美しい紫衣金欄の装いであります。この社会的に是認された因襲の城に立てこもつて、学問の競争によつて、天台座主の栄えに至りたい凡心、又それを善いことだと思ふ常識、だが、聖人はこの山を下りて、美しい因襲の塔よりも、真実の輝く吉水の禅房に走られました。

天曆十年六月、村上天皇の御召しによつて、僅か十五歳の若法師、源信和尚は、法華八講師の一人に加えられ、称讚浄土経を御進講申し上げ、御褒美の御衣を賜り、有頂天になつて大和の母君、安養院様のみ許に、その御衣を送られた時、母君よりきびしい教戒の手紙を受け取られました。源信和尚の母上は、すぐれた智慧を持った真実の教育をした人であります。曰く、

「山へ登らせ給ひてより後は、明けても暮れても床しきば心を砕きつれども、貴き道の人となし奉る嬉しやと思ひしに、内裏の交りをし、官位進み、紫甲青甲に衣の色を加へ、君にむかひ奉り、御経講読し、御布施のものをとり給ひ候ほどの名聞利養の

聖となりそこね給う口惜しさよ。唯命を限りに、樹下石上の住居、木食に身をやつしては、木をこり落葉を拾ひ、偏に後世たすからんとし給へとて、拵へしに、再び榮えて王宮の交りをし、官位階品さまさまの袈裟衣に出世をかざり、名聞のために御説法し、利養のための御布施、更に出離の御動作にあらず、唯輪廻の御身となり給うぞや。……

読んでゆくと「口惜しさよ。」とか「輪廻の御身となり給うぞや。」とか「浅間しく候」とか、悲歎のきびしい文字が列べられてあります。よい母を持たれたものであります。この母の教戒から、名利を超越した、不朽の聖座に輝く、横川の聖者が生れたのであります。

これ母の智慧そのままの慈悲が源信の一生を第一の世界から第二の世界に大転回させたのであります。天台座主を見ざるかわりに、横川の谷にかくれて、念仏に生きられたのであります。

愚禿 それは聖人の姓であつた。新たに北越の配所に愚禿と名告つた聖人は、その内容を顕わして、非僧非俗と申されました。

非僧 僧とは聖者である。能う限りの努力によつて、自己を根本的に改造して、自己を絶対人格にまで高めようとする聖者の世界が僧である。廃悪修善の行の宗教、断惑証理の智の宗教、共にその趨く所は、愚禿の体感より外の何ものをも得ることが許されなかつた。非僧とは二十年の内面的生活を通しての生きた体験的事実であつた。一切衆生の内的運動、久遠の業障が、聖人の自覚の内容となつて、聖人を聖者権化の世界からひき下して、大地にかえらしめたのであります。

非俗 けれども、聖人は決して俗ではなかつた。俗とは、その生活の本尊が、金であり、権力であり、名利であり、榮達であり、享樂である所の、何等の智慧も光つていない、盲目的な俗衆のことである。聖人は、かかる俗の天地より出でられたのである。その内観の世界において「悲しき哉愚禿、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることをよろこばず。」との悲嘆があつたが故に、聖人は、愛欲を超え、名利を越えて、南無阿弥陀仏に生きられたのであります。

聖人の本尊は如来であつた。ただ南無阿弥陀仏あつての聖人であつた。金が本尊であれば、拜金宗であり、名利が本尊であれば、名利餓鬼である。拜金のために、名利のために、安逸のために、神や仏を祈願の対象にするに至つては、外道の世界に墮在せるものであります。よろづのことみなもて、そらごとたわごとまことあることなきにただ念仏のみぞ誠であつた。

俗におつて俗におらず、聖におつて聖におらぬ、聖人の信境こそは、智慧なるが故に生死におつて生死におらず、慈悲なるが故に涅槃におつて涅槃におらぬ菩薩の大寂定の風格ではありますまいか。

世にもし真実の英雄を求めるならば、真理に忠実に生ききつた聖者でなければなりません。叡山を後にして因襲を超え、権勢よりも、名利よりも、榮達よりも、本質的に救われてゆく道を求められた聖人の前には、決して人間の幸福は待つていなかっ

た。吉水教団に対する弾圧、流罪、関東北国のさすらい、そして晩年に於ける京都のわび住い、その御一生は寂しくも亦わびしいものでありました。さびしかつたに違ひありません。世の俗塵に埋れつつも、唯ひたすらに念仏一道が開かれてゆきます。高僧伝にも残らず、大地名鑑の住職にもなりたまわず、世の荒波と戦いつつ、九十年の御生涯を終らせたもうたのであります。その中にもただ一貫しているものは、六字の大道であります。世の俗眼をもつてすれば、馬鹿げきつた下手な生き方であります。人のついて来そうもない生き方であります。

今は世にときめく人が「宗教とは、弱者や敗残者のみが入るべきもの、不幸に陥つた者の入る世界、老人のみのたたくべき扉である。」と言いました。弱者とは何のことでありましょう。仏の世界では柔道二段の力持ちを強者とは申しません。人と争つて腕で勝ち、才能の力で一代に巨万の富をつくる人を強者とは言いません。名譽欲のために奔走している者を強者とは言いません。

自己に克つことは、時に百万の敵に勝つよりも困難であり、自己自身の相を知ることとは、時に博士になるよりも至難であります。

貪欲、瞋恚、愚痴、浅ましい心から生い茂つた一切を洗い流して、我自身の中に、尊きものを求めた時、一体何が残るのでありましょう。

敗惨者とは何でありましょう。これおそらくは、打ち続く不幸のために、再び幸福の得られない人のことや、家産を失い、愛する者に死なれ、思いがけない災難に、大地に泣いている人のことでありましょう。しかし、それらの人が敗惨者でしょうか。入学試験に落第して、友は出世するにひきかえて、一生低い地位にいるのがはたして敗惨者でありましょうか。かのいわゆる強者と誇る人たちには聖人は弱者であり、敗惨者に見えるではありません。しかし私どもは問うて見たい。不正の金で買った地位、多くの人を下敷きにして得られた権勢、それらがはたして成功でありましょうか、強者でありましょうか。

私どもは如来の智慧によつて知らされました。何が無常であり、罪惡であり、亡ぶべきものであるか、何が永遠であり、尊いものであり、而してどうすることが真の人生の勝利であるかということ。

静かに／＼人生の雑音に耳を傾ける時、私に対する賞讃もあまりに的はずれのしたものであり、私に対する非難も亦あまりに私の真実を理解していてくれないことを知らされます。

私を真に知る者は私であり、やがて如来のみであります。私どもが生きてゆくのは人に理解されるためでもなく、世間の誰に知られるためでもない。たとえ私の心のどこかに世間的な子になれとき、やくものがいようとも。そして我等は世のいわゆる成功者であるよりも、こうした真の勝利者であることを求めます。

聖人の歩み給ひし道は、俗衆につけ入つて自分を豊らかにする生活ではなくて、よし世の悪罵や嘲笑を買おうとも、如来の召喚の声に生かされる道でありました。世の民衆を真実に育て上げないで、その愚さを利用して、今日の平安を貪つてゆく

宗敎家、それが、弁円の如く、真実の歩みをなそうとする者を傷つけようとするのは当然であります。

俗衆は如来よりも、衣を拝み、儀式を拝み、肩書を拝み、堂々たる殿堂を拝む。更に凡夫の功利心は、仏を己れの欲望の対象に祭り上げて、祈願しようとする。讃岐国善通寺玉泉院の佐伯僧正は驚くべき多くの印刷物を私に送り、拾銭より武拾円迄の金を送る者のために、八十八ヶ所に代りに参つてやつて、家内安全、息災延命、当病平癒、商売繁昌、五穀成就、各願成就を祈つてやるから金を送つて申し込めと、分厚い申し込み名簿まで送つて来ました。弘法大師はこうした俗衆に投ずる末世の弟子を持ち、歪曲された仏敎、邪敎にまで墮落した真言の祖師と立てられて、はたして成仏出来るでありませんか。或は大師そのものの歩みに純化しきらない所があつて拡大されたのかも知りません。親鸞聖人はかかる世界を「外儀は仏敎のすがたにて、内心外道を帰敬せり。」と悲歎せられました。私どもは何もかも純化しきつて歩まれた聖人の靈孫であることを喜ばずにはられません。聖人は私どもに深い智慧の世界を知らして下さいました。

私たちの同胞諸兄の中には、寺院僧侶の極く少数の方々があります。私は常にこの方々に対して尊敬の念を禁ずることが出来ません。これ等の方は皆、宗派心を超え、真に如来を聞き、如来に生かされんとする人たちだからであります。如来よりも宗派を生かし、み法より敎団を、正法よりも権勢を、求道よりも堂班を、信仰よりも学階を、正法の伝持よりも裕福な生活を、更に正しい伝導よりも安価な俗受けを求めて、唯高座に空虚なる自己を誤魔化し得ない方々であります。

如何に民衆の御機嫌が悪かろうと、貧しくなろうと、御法中の迫害に会おうと、それよりも強く正法を生かし如来に生きんとする方々であります。そうした歩みは敎団に対する反逆ではないかと考える人もあるかも知れない。しかし私は信ずる。如来は第一義諦であります。如来を生命として真実に歩む僧であつてこそ、本質的に敎団を生かす人であることを私は信じます。敎団は決して宗派心の我執によつては生かされない。

聖人の生きたもう道、それはあまりに地味であります。けれども人生の底にうなる大きな力の流れ、狭いけれども深い、そして根強いこの歩みこそ、真文化の基調ではあるまいか。我等は人生における船底の火夫でいい。高くそびゆる文明文化の殿堂の底に、如来金剛不壊の大信心に生きる力強い真実の人を求めらる。

法蔵菩薩の聖容は高原の陸地にそびゆる象牙の塔にはなくて、人間の生きる大地、はてしなく広がる群生の生きる生きた大地に拝せられる。我等は常にこの広野に立つべきであります。

聖人の巨歩を残したまいし生死煩惱の真唯中に、そしてそこにこそ必然の白道は横たわっています。